読　書　記　録　シ　ー　ト

読書番号　8　　氏名　　有田　志子

記入年月日　2003 年　6　月　15　日

題目（書名・論文名）　教科理解の認知心理学

著者　鈴木宏昭、鈴木高士、村山功、杉本卓

出版社　新曜社　　出版年　1989 5/28　　ページ数　　第４章，p153-219

書籍のありか　研究室、及び図書館

関連する箇所の内容

既有知識と文章理解について書かれた章である。

私たちは、既有知識を用いて、文章を補って読んでいる。しかし、それが誤読のもととともなる。書かれていなかったことも書かれていたかのように錯覚してしまうのである。

熟達者と初心者のちがいに、自分の意見なのか、事実なのかを区別するかどうかということがあげられる。また、　私たちは、既有知識と照らし合わせて文章を理解するときにスキーマを用いている。よって、文章理解のプロセスを説明するのに、スキーマ理論が用いられている。　スキーマとは、定義以上の情報を含む１つの一貫した意味の固まりである。１つのスキーマには、他のスキーマが入れ子になっていたりする。

私たちが「学習」（スキーマ理論でいう学習）するのは、既有のスキーマで経験や情報が説明できなかった場合である。その場合、私たちは、スキーマを書き直す必要がありスキーマが修正される。　　新しい知識の場合、記憶構造パックと呼ばれる(memory organization packet)というシーンという一般性の高いものがいくつも埋め込まれている。

自分の意見

Combined thought type of creativity で、なぜ、抽象的な情報ばかりを追って、具体的な情報、特徴的な事例を無視する人は、いけないのかといえば、スキーマを書き換えるチャンスを逃している。　新たな発見を逃しているということになるのだろう。その特徴的な事例を蓄えておけば、後々新たな発見につながるからだ。

ＭＯＰは、まだ確定していないより生の知識なのではないだろうか。